

武蔵野日曜聖書講筵 聖霊降臨節

聖霊のバプテスマ

――使徒行伝第2章1～41節――

1993年5月30日

小池辰雄

讃美歌312番「いつくしみ深き」 聖霊降臨 十字架が土台 聖霊の権化 霊的な神秘の現実
キリスト直結 キリストの中に入っていく 我を引き帰したまえ 聖書のドラマの中に自分が
入っていく 聖霊の賜物 無は十字架・無限無量は聖霊

【使徒2】

1 五旬節の日となり、彼らみな一処^{ひとところ}に集い居りしに、2 烈しき風の吹ききたるごとき響き、にわかに天より起こりて、その坐する所の家に満ち、3 また火の如きもの舌のように現れ、分かれて各人のうえに止まる。4 彼らみな聖霊に満たされ、御霊の宣べしむるままに異邦の言にて語りはじむ。

5 時に敬虔なるユダヤ人ら天下の国々より来りてエルサレムに住み居りしが、6 この音おこりたれば群衆あつまり来り、おのおの己が国語にて使徒たちの語るを聞きて騒ぎ合い、7 かつ驚き怪しみて言う『視よ、この語る者は皆ガリラヤ人ならずや、8 如何にして、我等おのおのの生まれし国の言をきくか、9 我等はパルテヤ人、メヂヤ人、エラム人、またメソポタミヤ、ユダヤ、カパドキヤ、ポント、アジア、10 フルギヤ、パンフリヤ、エジプト、リビヤのクレネに近き地方などに住む者、ロマよりの旅人――ユダヤ人および改宗者――11 クレテ人およびアラビヤ人なるに、我が国語にて彼らが神の大いなる御業をかたるを聞かんとは』12 みな驚き、惑いて互いに言う『これ何事ぞ』13 或者どもは嘲りて言う『かれらは甘き葡萄酒にて満たされたり』

14 ここにペテロ十一の使徒とともに立ち、声を揚げ宣べて言う『ユダヤの人々および凡てエルサレムに住める者よ、汝等わが言に耳を傾けて、この事を知れ、15 今は朝の九時なれば、汝らの思うごとく彼らは酔いたるに非ず、16 これは預言者ヨエルによりて言われたる所なり。17 「神いい給わく、末の世に至りて、我が霊を凡ての人に注がん。汝らの子女は預言し、汝らの若者は幻影を見、なんじらの老人は夢を見るべし。18 その世に至りて、わが婢女に、わが霊を注がん、彼らは預言すべし。19 われ上は天に不思議を、下は地に徴を現さん、即ち血と火と煙の気とあるべし。20 主の大いなる顕著し



き日のきたる前に、日は闇に月は血に変らん。²¹すべて主の御名を呼び頼む者は救われん』²²イスラエルの人々よ、これらの言を聴け。ナザレのイエスは、汝らの知るごとく、神かれによりて汝らの中に行い給いし能力ある業と不思議と徴とをもて汝らに証し給える人なり。²³この人は神の定め給いし御旨と、預じめ知り給う所によりて付されしが、汝ら不法の人の手をもて釘磔にして殺せり。²⁴然れど神は死の苦難を解きて之を甦えらせ給えり。彼は死に繋がれおるべき者ならざりしなり。²⁵ダビデ彼につきて言う「われ常に我が前に主を見たり、我が動かされぬ為に我が右に在せばなり。²⁶この故に我が心は楽しみ、我が舌は喜べり、且わが肉体もまた望みの中に宿らん。²⁷汝わが靈魂を黄泉に棄て置かず、汝の聖者の朽ち果つることを許し給わざればなり。²⁸汝は生命の道を我に示し給えり、御顔の前にて我に歡喜を満たし給わん」²⁹兄弟たちよ、先祖ダビデに就きて、我ははばかりず汝らに言うを得べし、彼は死にて葬られ、其の墓は今日に至るまで我らの中にあり。³⁰即ち彼は預言者にして、己の身より出づる者をおのれの座位に坐せしむることを、誓いをもて神の約し給いしを知り、³¹先見して、キリストの復活に就きて語り、その黄泉に棄て置かれず、その肉体の朽ち果てぬことを言えるなり。³²神はこのイエスを甦えらせ給えり、我らは皆その証人なり。³³イエスは神の右に挙げられ、約束の聖霊を父より受けて汝らの見聞きする此のものを注ぎ給いしなり。³⁴それダビデは天に昇りしことなし、然れど自ら言う『主わが主に言い給う、³⁵我なんじの敵を汝の足台となすまでは我が右に坐せよ』と。³⁶然ればイスラエルの全家は知るべきなり。汝らが十字架に釘けし此のイエスを、神は立てて主となし、キリストとなし給えり』

³⁷人々これを聞きて心を刺され、ペテロと他の使徒たちに言う『兄弟たちよ、我ら何をなすべきか』³⁸ペテロ答う『なんじら悔い改めて、おのおの罪の赦しを得んためにイエス・キリストの名によりてバプテスマを受けよ、然らば聖霊の賜物を受けん。³⁹この約束は汝らと汝らの子らと凡ての遠き者、即ち主なる我らの神の召し給う者と共に属くなり』⁴⁰この他なお多くの言をもて証し、かつ勧めて『この曲れる代より救い出されよ』と言えり。⁴¹斯てペテロの言を聴き納れし者はバプテスマを受く。この日、弟子に加わりたる者、おおよそ三千人なり。⁴²彼らは使徒たちの教えを受け、交際をなし、パンを擘き祈禱をなすことを只管つとむ。

●讃美歌312番「いつくしみ深き」

讃美歌312番「いつくしみ深き」のいわれをお話します。アイルランドのダブリンの近く



に生まれたジョセフ・スクライヴェン (1819～1886) という人が一人の女性と知り合って愛し合った。結婚の日の数日前に、二人でナイアガラ瀑布の下のオンタリオ湖の近くの小さな湖ライスレイクでボート遊びをしていた。ところが、おりからの突風が吹いて、ボートは沖合で転覆して、相手の女の人は溺死してしまった。予定の結婚式ができなくなつて、花嫁の葬式となつてしまった。それから彼は独身を通した。彼のお母さんも非常に泣き悲しんだ。彼がお母さんへの手紙の中で詩を書いた。その詩がこの讃美歌なんです。

このスクライブンという人のことを思うと、私はもう一人の人のことを思う。アメリカの詩人で『スケッチブック』を書いたワシントン・アーヴィング (1783～1859) です。あの人がやはり許嫁が結婚の数日前に病気で仆れてしまった。そこで彼も一生独身で過ごしてしまった。彼も同じような運命にあつたので、あの『スケッチブック』(1820) という本はやはり哀調を帯びています。

スクライブンスさんの墓碑には、この讃美歌の1、2、3番が三面に刻んであるそうです。英語で言うと、

“What a friend we have in Jesus”

という詩です。その訳が「いづくしみ深き」です。そういういわれのある悲壮な讃美歌です。

●聖霊降臨

今日はペンテコステで、使徒行伝2章の所です。ギリシア語では「ヘー ペンテコステヘーメラ」¹という。ペンテコステというのは第50番目の日、「第50日目」ということで、ニサンの月の14日から数えて――ニサンの月の14日とは過越^{すきし}の祝いの日といって初穂を神さまに供える日です――50日目の日のことです。旧約ではこれを50と言わないで、「7の7倍の翌日」というようなことで、「七七日」という言い方をしている。過越というのはもろん出エジプトの事とも関わりあっている。レビ記23・15～21をご参考ください。

キリストの復活からまた50日間、弟子たちは祈って待っていたら、50日目に聖霊が臨んだ。それで「聖霊降臨節」ということになっている。ペンテコステの本当の意味はその旧約から来ているわけです。しかも、それがちょうど、キリストの復活からずっと祈っていたら、50日目に聖霊が臨んだという、こういうわけですから、不思議なことです。

2章です。

1 五旬節の日となり、彼らみな一処^{ひとところ}に集い居りしに、² 烈しき風の吹ききたるとき響き、にわかに天より起こりて、その坐する所の家に満ち、³ また火の如きもの舌のように現れ、分かれて各人のうえに止まる。

これはスペインの画家が描いていますね。

4 彼らみな聖霊に満たされ、御霊の宣べしむるままに異邦の言にて語りはじ



む。

「異邦の言」を知らないのに、異言として語ったわけです。これは非常に高次の異言です。私たちは何も、昔の事だけを学ぶのではなくて、初代の使徒たちが聖霊を受けたことを学んで、現実に我々が今日、そのようなペンテコステのみ霊の世界により深く入りたい、というわけです。

●十字架が土台

これは歴史を二つに分けるような驚くべき事件です。キリスト教が展開する最初がこの聖霊降臨です。キリスト教界史の終りまで聖霊が主導的な内容ですから、聖霊の働いてないキリスト教界史なんてものは意味をなさない。ところが、み霊の働きのないのが大方なんです。

十字架が土台です。そこに聖霊がやってくる。十字架だけでもダメ、聖霊だけでもダメ。必ずこれは離すことのできない関係にある。ルカ伝12章49節に、

「⁴⁹我は火を地に投ぜんとて来^{きた}れり。

火とは聖霊です。

此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。

「聖霊が燃えれば、もう望むものはないんだ」と。

⁵⁰されど我には受くべきバプテスマあり。

十字架のことです。

その成し遂げらるるまでは思い^{せま}遍ること如何^{いかばかり}許ぞや。

⁵¹われ地に平和を与えんために来^{きた}ると思うか。われ汝らに告ぐ、然らず、反

つて分争なり。」(ルカ12・49～51)

それくらいに皆分かれてしまう。分かれるということは、

「本当に十字架・聖霊を受けなければこのように分裂してしまうぞ」

ということですよ。随分烈しい言葉です。家の中がみな割れてしまうと。キリストの言は、非常に優しい言があるかと思うと、嵐のような言がある。

●聖霊の権化

「神は霊である。拝する者も霊とまことをもってせよ」

というのは聖霊のことです。キリストは聖霊の権化^{ごんげ}だからね。彼自身は聖霊の権化です。けれども、十字架に架からざるを得ない。聖霊を与えるためには、十字架に架からざるを得ない。

「我には受くべきバプテスマあり」

とはこの十字架のことです。ゴルゴタで十字架に架かって贖罪をして、罪の贖いをして、



罪の贖いの土台をして、

「お前たちは信ずると信じないにかかわらず、事実をもつて自分はお前たちを贖った。受けとれ。受けとらなかつたら、それだけの話だ」

と。これが十字架という事実です。そうしたら、

「祈って待っている、そのうちが聖霊が臨むぞ」

と、そういう不可離の関係になっている。これをはつきり言う人が少ない。十字架をいい加減にしておいて、「聖霊、聖霊」なんて言っている、ヘタすると悪霊に切り替わってしまう。サタンがねらう。私たちは、

「十字架・聖霊」

と言う。その事実が私たちを本当に包んで、支えている。瞑想するだけで、その中に入ってしまう。私が、

「キリストの中に入る」

というのはこのことです。十字架・聖霊のキリストの中に祈り、入る。外側で祈っているのではない、その中に入ってしまったらダメです。

●霊的な神秘の現実

中世の神秘家のエックハルト(1260頃～1328頃)が『神の慰めの書』というのを書いている。

「聖霊の中に帰属せしめられる。聖霊と同等性になる。即ち、そこが一者の姿である」

と。聖霊と一つとなってしまう。エックハルトは「一者」という言い方をよくする。聖霊と一つに溶け合ってしまうわけです。ちょうど鉄が火で燃えると同じように。

「火と燃える熱烈な愛の世界、そこが聖霊を本当に受けとっている世界である。……聖

霊と一つとなってしまうと、火花が散って、この火花は単にただ地上の父母を忘れ棄てるのみにとどまらない。なおもその上に進んで自己自身をも棄て、断念し、本来固有の愛よりしてその真実の父なる神へと帰っていくのである」

神秘家らしい言葉です。

「一切は実は神さまの中にあるのに、そこから逃げようとしたってダメだ」

というようなことも書いてある。

本当の世界はみな「一」の世界です。「二にして一」なんです。我々の一の世界は、

「キリストと一つ」

になる。キリストと一つになるためには、聖霊が媒介する。十字架・聖霊をいただくと、キリストと一つとなる。そういう霊的な神秘の現実ということ。信仰は最大の神秘です。ダイスマンという人が『パウロ伝』を書いて一番先に、

「パウロは神秘家である」

と書いた。キリスト神秘です。



「²⁰われキリストと共に十字架せられたり。最早われ生くるにあらず、キリストわがうちに在りて生き給うなり。」(ガラテヤ2・20)

と、使徒パウロはそう言つて凄く展開したわけだ。

●キリスト直結

我々もキリスト直結、使徒たちと同じ次元に入っていく。

「使徒たちは偉いから」

なんて、そうではない。誰であつても入れる。パウロなんていう奴はさんざんキリストに逆らつていたのが、ひっくり返されて一番凄いやつになつてしまった。

キリスト者というのは全くキリスト属なんだ。キリストに属している。或いは、キリスト族、仲間なんだ。「お父さま」といつて祈つたつていいですよ。けれども、私はキリスト一点張りなものだから、

「主さま！」

としか祈らない。私はどうも直接にはダメなんだ。だから、「キリスト」なんだ。

「キリストの父なる神」

とは何もお髯のお父さんでも何でも無い。霊界の驚くべき存在をただ「父」と言っているだけの人はなしです。けれども、それは非常に人間的な言い方だから、自分のことは「子」になつてゐる。だから、聖書には「独子」^{ひとりご}と書いてある。そういうのはみな神話的な表現です。神話的な表現で霊的な現実を言っている。

「これは神話ではないか」

なんて、言つてたらダメなんだ。

「その神話的表現で何が語られているか」

ということですよ。

●キリストの中に入っていく

「⁴⁹我は火を地に投ぜんとて来^{きた}れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何をか望まん。⁵⁰されど我には受くべきバプテスマあり。」(ルカ12・49～50)

十字架のことです。ルカ伝12章49、50節は非常に大事なところですよ。ここではつきり、十字架・聖霊のことをキリストが語っている。そして、その通りに彼はされた。ペテロが「いや、十字架は……」なんて言つて袖引き止めたら、

「サタンよ、退け。私が十字架に架からなかったらどうなるか」

と仰つた。大変な方です。イザヤ書53章を地で行つたわけだ。

福音書の世界はイザヤ書35章をキリストが現じて歩いてゐる。天国を身邊に現じながら歩いてゐる。死人を甦えらせ、癩病人を潔め、病める者、悩める者を癒し、片っ端から天



国の中に入れてしまう。大変な方ですよ。東西古今にキリストに比較できる者はいない。そして、イザヤ書53章の十字架に架かる。今度は、ペンテコステの聖霊の世界を天界から展開していく。在天のキリストは我々の中に降臨する。キリストはみ霊で降臨する。み霊のキリストとして降臨する。在天だけではどうにもならない。降臨して、我々の前に、後ろに、中に来てくださる。

そういう現実を私はただ「主さま」と言うだけです。

「主さまー」

と言う時には叫びながらキリストの中に入るんです。こちら側でただ言っているのではない。投身している。身体を投じて、今度はキリストの中で「主さま」と言っているわけです。無条件で入れてくださる、十字架の門を通って。

「でも、お前は」

なんて、そんなことはキリストは言わない。誰でも無条件に入れてくださる、いかなる状況にあらうとも全身で「主さま」と言って平伏すなら。その心は平伏しです。我々の本当の姿は平伏しです。

これを「無」という。無の世界とは、我無きという世界は形で表せば平伏しなんです。この無は賜った無で、悟った無ではない。キリストが十字架で私に賜った無罪の世界、罪の無き世界です。賜りたる無だから、そこで平伏す。その姿は平伏しです。そこで「主さま！」と叫べば、キリストの中に入っていく。入れられる。

●我を引き帰したまえ

エレミヤが、

「18…エホバよ汝はわが神なれば我を牽^{ひき}転^{かえ}したまえ。然ば我転^{かえ}るべし。19われ転^{かえ}りし後に悔い教を承^{うけ}しのちに我が脾^{もも}を撃つ。…」(エレミヤ31・18、19)

「私は帰れない、ダメなんです。どうぞ、あなたが引き帰してください。そうしたら、あなたの中に入っていきます」

と、これが本願の効力により頼むところの信仰です。よく、

「神に立ち帰れ、立ち帰れ」

と言う。「悔改」とは「立ち帰り」ということです。

「立ち帰ることもできないで、ふつつぶれていますが、どうか、私を引き上げてくださーい」

と。

「我を引き帰したまえ。然らば我れ帰るべし」

とある。

「どうぞ引き帰してください。そうしたら帰ります」



と。これは、

「倒れてしまつて、どうにもなりません。お母ちゃん、起こして！」

と子供が言うのと同じだ。

●聖書のドラマの中に自分が入っていく

聖書を読むと、読入、聖書の中に入ってしまう。聖書のドラマの中に、その現実の中に自分を入れてしまう。聖書を読むとは、そのドラマの中に自分が入っていく。らい病人なら、自分がいらい病人になつて、キリストに癒される。

とにかく、聖書というのは所々に、まるで輝いているような文句があるから、楽しい。

「³³然れどかの日の後に我がイスラエルの家に立てんところの契約は此なり。

即ちわれ我が律法をかれらの衷^{うち}におき、その心の上に録^{しる}さん。我は彼らの神

となり彼らは我が民となるべしとエホバ言いたもう。³⁴人おのおのその隣と

その兄弟に教えて汝エホバを識れと復いわじ。そは小より大にいたるまで悉

く我をしるべければなりとエホバ言いたもう。

もう、人が言う必要がない、という。

我れ彼らの不義を赦しその罪をまた思わざるべし。」(エレミヤ31・33～34)

「もう思わない、忘れてしまふよ」

と。これがエレミヤの新しき契約ということです。正に新約的なものです。

人間はよく人の過去のことを

「あれはこうした、ああした」

なんて、下らないことを言っているが、そういうことを言う人はサタンの手下になる。

「愛はすべての罪を覆^{おお}う」

という。愛は罪を消してしまう。キリストに私たちは十字架と聖霊で愛された。これは大変な愛だ。この愛で救われた者が人を愛せないことはない、許せないことはない。お互いに、

「ああ、いいよ、何でもないよ」

とゆるしあう。人のために祈っていると、いよいよ自分が神さまの天国に入れられる。祈っている世界が天国になつてしまふ。

「恵^{さいわい}福なるかな、霊の貧しき者、天国はその人のものなり」

とは素晴らしい言葉だ。それが霊が貧しい事態、ゼロになつていく世界です。ゼロになつて人のために祈る。旧約には人のために愛をもつて祈っている祈りがほとんどない。そのことをはつきり書いているのは福音書とパウロの書翰です。ペテロもそうですけれども。

新約聖書は無駄がない。大変なものです。聖書を楽しく読んでいると、力が来てしょうがない。あなた方、疲れたと思ったら、新約聖書を読めば力がきてしまう。私は疲れもほとんど知らない。同じエネルギーの世界に皆さんを入りたいから、私は教えているのでは



ない、告白している、

「キリストはかくのとき方であります」

と。皆さんと十字架・聖霊の世界のありがたさを味わっているわけです。

●聖霊の賜物

5時に敬虔なるユダヤ人ら天下の国々より来りてエルサレムに住み居りしが、⁶この音おこりたれば群衆あつまり来り、おのおの己が国語にて使徒たちの語るを聞きて騒ぎ合い、⁷かつ驚き怪しみて言う『視よ、この語る者は皆ガリラヤ人ならずや、⁸如何にして、我等おのおの生まれし国の言をきくか、⁹我等はパルテヤ人、メヂヤ人、エラム人、またメソポタミヤ、ユダヤ、カパドキヤ、ポント、アジア、¹⁰フルギヤ、パンフリヤ、エジプト、リビヤのクレネに近き地方などに住む者、ロマよりの旅人――ユダヤ人および改宗者――¹¹クレテ人およびアラビヤ人なるに、我が国語にて彼らが神の大いなる御業をかたるを聞かんとは』¹²みな驚き、惑いて互いに言う『これ何事ぞ』火の如き風が吹いて、みんな聖霊に満たされて異言を語った。いろいろな他の地方の言葉を異言で語っている。それを聞いて皆は驚いている。

13或者どもは嘲りて言う『かれらは甘き葡萄酒にて満たされたり』何を言ってるか。

14ここにペテロ十一の使徒とともに立ち、声を揚げ宣べて言う『ユダヤの人々および凡てエルサレムに住める者よ、汝等わが言に耳を傾けて、この事を知れ、¹⁵今は朝の九時なれば、汝らの思うごとく彼らは酔いたるに非ず、¹⁶これは預言者ヨエルによりて言われたる所なり。¹⁷「神いい給わく、末の世に至りて、我が霊を凡ての人に注がん。汝らの子女は預言し、汝らの若者は幻影を見、なんじらの老人は夢を見るべし。¹⁸その世に至りて、わが僕・婢女に、わが霊を注がん、彼らは預言すべし。……

ヨエル書の預言をまたペテロがここでもって言っているわけです。

22イスラエルの人々よ、これらの言を聴け。ナザレのイエスは、汝らの知るごとく、神かれによりて汝らの中に行い給ひし能力ある業と不思議と徴とをもて汝らに証し給える人なり。²³この人は神の定め給ひし御旨と、預じめ知り給う所とによりて付されしが、汝ら不法の人の手をもて釘磔にして殺せり。²⁴然れど神は死の苦難を解きて之を甦えらせ給えり。彼は死に繋がれおるべき者ならざりしなり。……

マグダラのマリヤに一番先に現れたね。驚くべきことが書いてあるな。

37人々これを聞きて心を刺され、ペテロと他の使徒たちに言う『兄弟たちよ、



我ら何をなすべきか』³⁸ ペテロ答う『なんじら悔い改めて、おのおの罪の赦しを得んためにイエス・キリストの名によりてバプテスマを受けよ、然らば聖霊の賜物たまものを受けん。³⁹ この約束は汝らと汝らの子らと凡ての遠き者、即ち主なる我らの神の召し給う者とに属つくなり』

イエス・キリストの「名により」てではなくて、「名に在つて」「名の上で」ということです。この場合の「聖霊の賜物」とは聖霊という賜物の意味です。

⁴⁰ この他なお多くの言をもて証し、かつ勧めて『この曲れる代よより救い出されよ』と言えり。⁴¹ 斯てペテロの言を聴き納いれし者はバプテスマを受く。この日、弟子に加わりたる者、おおよそ三千人なり。⁴² 彼らは使徒たちの教えを受け、交際まじわりをなし、パンを擘さき祈禱ひたすらをなすことを只管つとむ。

● 無は十字架・無限無量は聖霊

それから、3章の有名な、生まれつきの跛者を立たせたことが書いてある。

「私ではない、キリストの御名がなしたのだ」

という、凄いところだ。ペテロもパウロも本当に空っぽになってキリストが充滿しているものだから、エライことになる。

しつかり祈り入りなさいよ。祈入しなければダメです。瞑想し祈入し、その現実の中に本当に入る。そしたら、自然に身体が震えたり、異言が迸はなつたり、女の方だったら霊歌が出るかも知れない。

「二、三人、わが名にありて集まって、祈りを共にする」

ことも結構なことです。何も日曜日に限ったことではない。とにかく、み霊の現実を体験、体現てげんしていかなければ、本ものにならない。十字架・聖霊の現実です。

まあね、もうじき90歳にもなろうとしている人間がやつと

「聖書がおもしろい」

なんて言っているのだから、あなた方はもつともつと凄いことになってくる。正直、私も随分聖書は読んだけれども、み霊の現実「これでいい」という所はないから。限りない。

「無即無限無量」

です。無は十字架が賜った無。無限無量は聖霊。そういうわけです。十字架が賜った無、無私、私の無い世界。そうすると、聖霊がやってくる。即無限無量、聖霊が限りなく。

「ゼロ＝無限大」

ということですよ。

